

## ご近所散歩

大森まさ子

電車の駅から家までは900メートル。私の足で歩いて15分ばかりである。その距離を、以前は自転車を利用していた。この頃ではきるだけ歩くようにしている。自転車の時も歩く時も、行く道はいつも同じである。出かける時は、電車の時間を気にしてせつせと歩く。帰りはやれやれと言う気持ちで早く家に帰りたい。

その日は用事が早く終わり、のんびりと家路に着いた。ふと、違う道を通る気になって左に曲がった。いつも通る手前の細い道だ。

曲がり角に「この先通り抜け出来ません」の立て札が立っている。近所なのに初めての道だ。行き止まりなのだろうか。ちよつと、わくわくした。

私は子どものころ、路地が好きだった。路地は、にぎやかな表通りに建ち並ぶ家と家との間にできた隙間のような道。一人人やつと通れるほどの幅の道だ。その道はその奥に暮らす人たちだけの道で、奥に用の無い人はお断りと、他人の侵入を拒んでいる。

お断りと言われると、入ってみたくなくなる。その奥はどうなっているのだろうか。ひよつとしたら、隠された秘密の世界があるかもしれないと子どもの私は想像した。友だちとキョロキョロ、ドキドキしながら路地を探検したのを思い出す。

その日、曲がった道の左側には家が並んでいた。土地は道より一段低く、家はみんな背中を見せて、出入り口はなかった。右側は畑だった。それほど広くない畑の向こうに、土壁の農家風の建物が見

える。人が住んでいるのだろうか。いつもの道には築二、三十年の家が並んでいる。並んだ家々のその裏に、まるで忘れられたかのよう古い農家や畑が残っていたのだ。のどかで、人が無い。

ふと、この道はどこに続いているのだろうかと不安になった。わが家から500メートルばかりの所で、迷子になっているような感覚に襲われていたのだ。

スツと、肩をかすめるように、高校生の自転車が追い越していった。

多分、この道は行き止まりではない！ やがて、見慣れた道に出た。

この町内に住んで、もう少しで40年。この周りにも知らない風景がいっぱいあるのかもしれない。町内の地図を頭に思い浮べた。あの路地の奥に入ってみよう。あの用水はどこへ流れて行っているのだろうか。

この年だ。徘徊（はいかい）老人かと心配されるかもしれないが、ご近所散歩、少しずつ歩いてみたいと思う。

作者 大森まさ子

題名 ご近所散歩

山陽新聞夕刊

2019.06.06 掲載